

生還者たちのビルマ

太田 毅

生還者たちのビルマ

——知られざる戦場の記録

● 葦書房

太田 毅（おおた・たけし）

1922年、熊本市に生まれ、福岡県で育つ。機械工、電気工、兵役、電気主任技術者を経て、1951年、福岡県巡査となる。1972年、警視となり、業務運営対策室長、警務部管理官、前原署長、甘木署長を歴任、1978年9月退職。1979年5月から教育心理センターを開設、現在に至る。

著書に『不満からの挑戦』（立花書房）、『戦略発想アプローチ』（同前）、『ながら教育のすすめ』（東京法令出版）、『はっぴいエンゼル』（東京法令出版）、『拉孟』（昭和出版）、『40年目のビルマ戦』（葦書房）がある。

現住所 福岡市城南区干隈2-22-7

電話 092 (861) 1958

生還者たちのビルマ

——知られざる戦場の記録

一九八七年八月 一日第一刷印刷
一九八七年八月 十日第一刷発行

定価一、九〇〇円

著者 太田 毅

発行人 久本 三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂一丁目一四番二一号

電話 〇九二（七六一）二八九五

振替 福岡一三三九四三〇

製印 本刷 凸版印刷株式会社

落丁・乱丁本おとりかえいたします

0095-8719-0135

挺身隊に志願する……………	77
『泥と川と爆弾と』……………	84
有川爆弾小隊の由来……………	89
中国兵に変装して山中へ……………	95
挫折……………	107
小室工兵連隊長の自決……………	120
不可能を強いられた有川挺身隊……………	124

騰越城の脱出者——名捕手吉原正喜の行方

元巨人軍捕手吉原正喜はどこで戦死したか……………	135
吉原兄弟と私……………	138
騰越からの生還者……………	142
吉原は転属してインパールへ……………	149
遠征軍総反攻を撃砕……………	152
騰越城包囲さる……………	156

城壁陣地で迎え撃つ……………163

死闘の日々……………180

玉碎戦場……………186

中隊長殺害事件はあったのか？……………191

語られぬ真実……………196

虜囚……………204

吉原正喜の墓……………208

吉原と最後に会った人……………212

飢餓と病魔と大軍と——平冨守備隊四カ月の苦闘

大村連隊の武勲……………225

安部和壮少佐の人間性……………234

平冨守備隊の配備……………241

遠征軍の総反攻開始……………245

平冨陣地が敵に占領されている！……………254

龍陵最後の死闘——秘密兵器の最期

籠城戦始まる……………	261
惨！ 砲門に敵弾命中……………	265
敵山砲陣地壊滅……………	271
飢餓と病魔との戦い……………	276
傷病兵を救出して反転……………	289
山砲一門の帰還……………	294
宮本小隊は後衛尖兵……………	309
またも撤退援護小隊に……………	319
今岡部隊は龍陵を死守すべし……………	329
安部大隊は右第一線……………	332
龍陵に危機迫る……………	336
平憂帰還者で臼砲隊編成……………	342
乱戦の龍陵へ……………	349

白砲を埋めて脱出.....354

再び龍陵へ.....359

白砲爆砕.....367

九八式白砲部隊について

374

あとがき

384

参考文献

391

生還者たちのビルマ——知られざる戦場の記録

巨弾を撃て——ウィンゲート空挺団掃蕩戦

第五十六師団《龍》

昭和十六年十月八日編成下令、十二月二十三日久留米師管で編成を完結した。その壮丁の大部は北部九州三県出身で、第十八師団とは兄弟師団である。

師団主力は、十七年二月十三日内地出發、第十五軍の隷下に入り、ビルマ進攻作戦に参加して北部ビルマと怒江以西の雲南を攻略した。その後雲南にあって作戦し、連合軍の反攻後は雲南地区で防戦、拉孟、騰越等の玉碎は、蔣総統をして日本軍を見習えと督戦させた。総兵力二八、九八〇、戦没者一七、八九五、帰還者一一、〇八五。

第十八師団《菊》

昭和十二年九月、第十二師団管区で動員を完結した師団で、前述の第五十六師団とは同じ師管の兄弟師団である。

師団は、昭和十二年十一月杭州湾に上陸し、南京攻略戦に参加、十三年十月十二日にはバイヤス湾に上陸して広東攻略戦に参加し、広東付近の警備に当たっていたが、十六年十一月六日、第二十五軍の戦闘序列に編入され、マレー進攻作戦に参加、シンガポール攻略後、第十五軍隷下に入り、ビルマ進攻作戦をはじめ、フーコン作戦、イラワジ会戦に参加するなど、八年間にわたり精強師団として活躍した。ビルマ上陸後の総兵力三一、四四四、戦没者二〇、三九三、帰還者一一、〇五一。

神崎さんとの出会い

神崎さんから、久しぶりに電話があった。二月下旬にビルマに行くという。

福岡県京都郡豊津町に住んでいる神崎さんのビルマ行きは、これで十回を数える。第一回は、昭和五十三年一月の政府派遣第二次ビルマ方面戦没者遺骨収集団員に選ばれ、三十一年ぶりにビルマの土を踏んだときである。それ以来、神崎さんは、憑かれたように毎年ビルマに行っている。ビルマの住民や政府要人にもかなりの友人ができた。神崎さんにとって、ビルマは恋人のようなものである。

「またビルマですか」

というと、

「これが最後になるかもしれない」

ちょっとしんみりした返事である。

神崎さんは、私より四歳上だから、今年の誕生日がくれば六十九歳になる。いろいろ不便なビルマの旅程は、かなり骨が折れそうである。

神崎さんは、大東亜戦争中、ビルマ派遣《龍》第六七三九部隊（第五十六師団野砲兵第五十六連隊）の一員として従軍しており、同じ連隊にいた私の上司であり、先輩でもある。神崎さんと話していると、汗ばんだカーキ色の軍服の匂いが鼻先に漂ってくる。それは、私の青春時代の苦くも懐かしい、忘れがたい匂いである。いつもそう感じるのは、私の大脳の中に、神崎さん―軍隊―戦場という条

件反射の回路ができてくるのかもしれない。

昭和十八年四月十日、私は福岡県久留米市の西部第五十一部隊（野砲兵第五十六連隊留守部隊）に現役兵として入營した。私たちは、龍部隊要員として、やがてビルマに送られることになっていた。内務班で、毎晩のように古兵たちから殴られながら一期の検閲を終えると、間もなく（七月ごろだったと記憶する）ビルマの原隊から、連隊指揮班長の池田喜六大尉に率いられた、補充要員輸送官たちがやってきた。神崎軍曹もその中の一人であった。

ビルマの原隊では、この年の一月から五月にかけて、雲南省の拉孟^{ラモ}守備隊に配備された第三大隊（金光恵次郎少佐・十榴八門）を除き、第一大隊と第二大隊は野砲から山砲に改編されていた。師団の守備範囲である雲南省は重畳たる山岳地帯であるから、野砲の運搬は困難で、分解搬送できる山砲に切り替えたのである。

入營以来、改造三八式野砲（明治三十八年制式の三八式野砲の射程を伸ばすため、I脚をY脚に改造し、仰角を大きくしたもの）で訓練を受けていた私たちは、改めて山砲の訓練を受けることになった。

原隊から来た大串陸男少尉、谷山繁利曹長、神崎博軍曹の三名は、營庭で九四式山砲の「分解」「結合」「駄載」（駄馬の背に砲の各部品を載せること）「卸下^{しやくか}」（駄載した砲の部品を地上に降ろすこと）「射撃動作」などの訓練を指導した。

神崎軍曹は、輸送官の中で私たちといちばん近い階級であったこともあり、訓練の休憩時間には、初年兵の中にはいって気軽に話しかけた。神崎軍曹は、大正七年六月生まれで、昭和十三年十二月久留米の野砲隊に入營、下士候となり、豊橋の陸軍予備士官学校砲兵生徒隊に入隊、十五年十月卒

業後原隊復帰、十七年二月門司港出帆、ビルマに出征したのである。

初年兵にとって、これから連れて行かれるビルマや雲南の事情は関心の的であった。原隊の戦闘状況から駐屯地の風景や食べ物のことなど、質問を浴びせたが、神崎軍曹は川筋弁（遠賀川筋の荒っぱさと、さっぱりした気性、そのままの言葉）で、面白おかしく説明してくれた。神崎さんと私の関係は、このときに始まるのである。

入営前の私は、とくに軍国少年というほどではなかった。できれば徴兵延期して勉強を続け、一年後、電気主任技術者第二種検定を受けたいと思っていた。しかし、とてもできない相談なので、きっぱりあきらめ、軍隊に入っても困らないように体力づくりに努めた。私が、他人に比べ忍耐力が強く、適応性に富み、どんなことにも熱中できたのは、幼時から体験してきた貧乏生活のおかげであった。

青年学校で、みっちり教練を受けていた私は、砲の操作もうまくでき、一期の検閲では第一分隊の二番砲手（照準手）をつとめた。山砲の訓練でも、野砲の場合と同じく成績はよかった。柔道や相撲で鍛えた体力がものをいって、砲身やその他の部品を担いで運ぶ「臂力搬送」でも抜群であった。

神崎軍曹は、そんな私に目をつけ、

「太田、輸送間はおれの当番になれよ」

と、なかば命令口調で頼んできた。神崎軍曹の人柄に好感をもっていた私は、二つ返事で承諾した。

八月二十八日夜、私たちは、兵営を静かに出発、翌日門司港で「安洋丸」という九千トンの貨客

船に乗り込み、ビルマへと旅立った。池田喜六大尉は、師団各連隊の補充兵八百名の輸送指揮官だったので、大串少尉は副官格、神崎軍曹は輸送部隊の給与掛になった。給与掛は、酒、タバコ、甘味品などの配給にあたり、サイゴン、シンガポール、ペナン等の宿舎で一週間から四週間宿営したときは、各隊から要員を集め、炊事班を指揮した。私はその助手であった。

給与掛をする、酒や食物に不自由しないのが軍隊の習いだ、神崎軍曹も私も、酒、タバコを好まなかった、いつも公平に分配していた。神崎軍曹は、自分の財布を私に委せ、外出するときもらっていた。金品に淡泊な神崎軍曹の性格を私は尊敬していた。

兵站宿舎では、将校と下士官は個室だったが、給与掛軍曹は、物品を置いてある大きな部屋をあてがわれていたので、私も一緒に寝起きしていた。輸送間に個室暮らしをした兵隊は私一人で、同年兵たちはうらやましがったが、反面不自由でもあった。

神崎軍曹は寝物語りで、よく拉孟陣地の話をしてくれた。そして、「連隊に着いたら人事掛に頼んで、お前を拉孟に連れていくからな」と何度も言った。私も神崎軍曹と一緒になら辺境の拉孟だて行くぞという気になった。

しかし、下士官候補者隊への入隊を志願していた私は、輸送の途中、ビルマの首都ラングーンから、マライ半島のポート・ディクソンにある南方軍下士官候補者隊へＵターンしたので、そのとおりにはならなかった。

もし、拉孟の金光大隊に配置されていたら、翌十九年九月七日に玉碎した守備隊員、一、三一〇名と同じ運命をたどったであろう。私は幸運に恵まれたというべきだろうか。下士官募集があったとき、どうせ満期除隊など望むべきもないなら、勉学の機会を得て、下士官、将校への道を進もう

と思ったのである。多くの同年兵は、下士候隊の厳しい訓練をきらい消極的だったが、頑健な身体と雑草のような適応力をもっていた私は、他人にできることなら恐れることはないさと、気軽に志願したのである。

マライの南方軍下士官候補者隊では、一月初めから十月三十日まで、みっちり十カ月間教育を受けた。卒業も迫った九月二十日すぎ、ニュースで龍兵団の拉孟、騰越両守備隊の全員戦死を知った。拉孟には、懐しい神崎軍曹（この当時曹長になっていた）や同年兵がいたのに、すべて散華したのだ。夜、寝台に横たわってからも、そのことを思うと、涙があふれて仕方がなかった。

十一月一日、教育隊を出発、パンコックやラングーンの兵站宿舎に長く止められ、やっと原隊にたどり着いたのは、昭和十九年二月十日であった。連隊長に帰隊の申告を済ませ、人事掛下士官をとらえ、無駄とは思いつながら「拉孟にいた神崎曹長は戦死されたでしょうね」と尋ねてみた。すると意外な返事があった。

「神崎曹長は、臼砲隊でフーコンへ行っていたから元気にいるよ」

「えっ」

「十中隊にいるから、そのうちに会えるよ」

うれしさのあまり、一瞬茫然となった私に、人事掛は笑顔で教えてくれた。

「神崎さんが生きていた！」

私は、体中が熱くなるような喜びを感じた。

第十中隊は、拉孟の第三大隊から選択されて九八式臼砲隊に行った神崎曹長ら生き残り組と、後

方のラシオにいた第三大隊段列（彈藥や糧秣を運搬する中隊）とを合わせ、十榴一門、改造三八式野砲一門の編成であった。自動貨車（トラック）部隊だったので、公路沿いに活動する關係上、連隊本部付近で戦闘することが多かった。

伍長に任官した私は、第一大隊第一中隊の観測掛下士官として配置されたので、歩兵の第一線近くで戦闘することが多く、気になりながら、終戦まで神崎曹長と再会することはできなかった。

終戦直前の昭和二十年七月二十一日、野砲兵第五十六連隊の一部は、連隊長山崎周一郎大佐の指揮で、ビルマ・シャン高原南部のカレン州ドウラク部落の、英軍指揮のカレン族ゲリラ隊の討伐に出撃した。ところが、翌二十二日、敵の巧妙な作戦で盆地に誘引され、山崎連隊長以下多くの戦死者を出した。

第一中隊からも一個小隊（山砲一門）が参加、私もその一員としてドウラクに向かった。二十二日の朝方、敵に包囲された台地上の山砲を下げようと車輪にとりついていていた私は、左大腿部に小銃弾の貫通銃創を受け、四日後戦友たちに担がれ、やっと基地に帰れた。

野戦病院に収容され後送の途中で終戦となった。傷病者は牛車や象に乗せられてタイ国北部のチェンマイ郊外に運ばれた。まだ左脚を引きずり、ボロ服をまとった私は、チェンマイ山中の竹造りの兵舎で神崎曹長に再会した。

神崎曹長は、さながら乞食のような姿の私を眺めると、

「その服をみんな脱いで、これを着ろ」

と、自分の着ていたシャツとズボン、袴下（ズボン下）まで、さっと脱ぎ、私にくれた。神崎曹長は禪フンドシひとつになっていた。被服事情の悪いそのころのことだったが、実力者の神崎曹長はスベ